

関西ペイント…真に顧客が求めているものを

関西ペイントは、1917年に小田村神崎、大阪繊維工業（現・ダイセル）の隣接地で、「関西ペイント工業所」として起業しました。創業者の玉水弘は、もと東京帝国大学工学部応用化学科の技術者で、日本ペイントや東亜ペイントの取締役や技師長を歴任しました。

従業員 30 人余で顔料・塗料の製造と販売をはじめたものの、資金不足で化学プラントや研究施設拡大に行き詰っていました。そこで玉水は、同級生で東京帝国大学助教授の田中芳雄に相談すると、田中は岩井商店（現・双日）を率いる岩井勝次郎を紹介しました。以前、岩井は英ハバック社から塗料を輸入していましたが、大戦により輸入が中断してしまい、国内製造拡大、技術力の向上の必要を強く感じていました。そこで拡大する塗料需要に応えるために、岩井は玉水の事業を支援することを決めました。

岩井商店（現・双日）が出資と販売支援を受け持ち事業譲渡することで合意し、1918年、関西ペイントを設立が設立されました。岩井商店の専務・安野譲が兼任で社長に、専務取締役兼技師長として玉水弘が就任し、新体制での操業が始まりました。本社および工場には5万7000㎡が充てられ、設備は見違えるように充実したものとなりました。

しかし設立まもなく経済恐慌に見舞われたり、後発メーカー故の様々な苦難を経験します。そこで、「他社にないもの、真に顧客が求めているものをつくれれば、必ず売れる」との信念で、研究開発を進めました。非油性塗料で速乾性塗料（ラッカー）の開発に注力した結果、1926年業界初のラッカーの国産化にこぎつけました。当時、フォードやGMが日本で下請け工場を開設したり、また国内各メーカーも自動車生産を開始し、速乾性塗料の需要は急伸していました。ラッカーの製造は、関西ペイントの社業の礎となったのです。

関西ペイントは自動車向け塗料では国内最大手で、トヨタをはじめとした大手自動車メーカー全てを顧客に抱え、高い品質水準に応え続けてきました。独自の発色や傷つきにくい塗装などで、世界でも屈指の技術を誇り、自動車用塗料分野ではアジアで首位です。

しかし 2014 年に国内総合トップの座から陥落するショッキングな出来事が起きました。当時2位の日本ペイントが持ち株会社制に移行し、シンガポールの大手、ウットラムグループとアジアで展開する合併会社を連結子会社化したのです。その結果、連結売上高で5000億円規模となった日本ペイントは、関西ペイントを一気に抜いて塗料メーカー国内最大手に躍り出ました。世界でも5番手位の規模です。

昨今は国際的にM&A（企業の合併や買収）での規模拡大が盛んですが、塗料業界もその例外ではありません。オランダのアクゾ・ノーベル、アメリカのPPGインダストリーズといった世界大手は。この10年で着々と買収を重ね、グローバル体制の基盤を固めています。一方、この潮流に乗り遅れた感のある関西ペイントは、気がつけば世界でもトップに遠い2番手グループに後退していました。顧客である自動車メーカーに塗料を供給するのを得意としていたため、塗料事業を切り開く意識が希薄になってしまったことが要因と思われます。世界で約13兆円と言われる塗料市場のうち、自動車向け塗料は6%程度にすぎません。世界市場の約4割は住宅やオフィスの内外装向けの建築用塗料が占めています。一方、日本国内で建築用塗料の市場が小さいため、自動車向けで圧倒的優位に立っていた関西ペイントは、総合塗料メーカーへの脱皮に消極的になってしまったようです。世界の塗料業界の再編は終盤に入りつつありますが、関西ペイントにもまだチャンスがありそうです。（次号につづく）

参考資料・関西ペイント(Wikipedia)・関西ペイントの「日本らしからぬ」国際戦略(日経ビジネスオンライン)・関西ペイントの設立(双日歴史館)